

# 駅前通り界隈



住之江橋に立つ桜井祐一の作品

街はずれであったため、駅と中心市街地を結ぶための道を整備する必要がありました。さまざまな案が検討された結果、現在の住之江町通りが新たに開削されることになったのです。しかし、これは橋の新設も含む大工事で、ようやく開通したのは駅開業から半年も後のことでした。明治三十五年（一九〇二）

ここが「住之江町」と名付けられたのは、明治四十三年（一九〇〇）のこと。「住之江」の名は、新道開削にともなって新設された住之江橋に由来します。この橋の名は、南隣の相生橋と同じく謡曲「高砂」から命名されました。現在の住之江橋は平成七年（一九九五）に架け替えられたもので、米沢出身の彫刻家桜井祐一作のブロンズ像が配され、また風景を楽しむバルコニーが設けられるなど、米沢の玄関口にふさわしい景観を見せています。また、近年には電線などを地下に埋

設し、無散水融雪設備を導入するなど、住む人にも訪れる人にも快適な街づくりが進められています。

**旭町通り**

住之江町通りとさまざまな意味で対照的なのが、もう一方の通りである旭町通りです。同じく駅から西にのび、相生橋の手前で国道二二二号線と合流します。

住之江町通りが行政主導で整備された新道であるのに対し、旭町通りは江戸時代からあった道をつなぎ延ばして駅まで通した民間主導の道で、通り沿いには義経伝説で知られる常信庵など由緒ある寺院もあります。

ここが「旭町」と名付けられたのは、昭和七年（一九三二）のこと。米沢市街

の東に位置することと、これからの発展を期して景気のいい名前を、ということから名付けられたといえます。意外にも街が新しいのは、旧来の街から近いがゆえに、この通りを新たな街として独立させることを急がなかったからかもしれません。

現在の旭町通りには、老舗の牛肉店の店構えにくわえ、レトロモダンな外観の米沢信用金庫東支店、古民家



米沢信用金庫東支店



現在の米沢駅

駅前通りは、その名のとおり駅とともに生まれ発展しました。米沢駅の開業は、すなわち奥羽線（現在の奥羽本線）が開通した明治三十二年（一八九九）五月十五日。当時の新聞が報じたところによると、その日はまだ暗いうちから市民が駅前につめかけ、大変な混雑ぶりであったとい

ます。一番列車は、さぞかし華やかな出迎えをうけたのであろうと思いきや、実際は簡素な歓迎式典が催されただけでした。それもそのはず、この直前の四月二十八日、免許町（現在の大手一丁目あたり）から駅前まで二〇〇戸以上が焼失する大火があり、からくも駅舎は焼け残ったものの、米沢市では準備していた大祝賀会の企画を変更せざるをえなかったのです。それでも、予定どおりに列車は到着し、数多の市民がそれを心から祝しました。周辺が焼け野原にもかかわらず米沢駅の開業は、

人々の心に大きな希望と勇気を与えるものであったことでしょう。

現在の米沢駅舎は、その延焼をまぬがれた駅舎から数えて四代目にあたり、山形新幹線開業にあわせて平成五年（一九九三）に建て替えられたものです。米沢を代表する近代建築である旧米沢高等工業学校本館（現在の山形大学工学部／重要文化財）を模したデザインとなっています。

ところで、米沢駅を出ると正面には二本の道が西に向かつてのびています。さて、いずれが駅前通りなるや？とい

えば、それは両方と答えなければなりません。右側の住之江町通り、左側の旭町通り、その両方が駅の開業によって新たに生まれた街だからです。

**住之江町通り**

住之江町通りは、駅から西にまっすぐのび、平和通りに達する道です。もとは「停車場新道」とよばれ、読んで字のごとく停車場＝駅のために新設された道路でした。

実は、開業当時、米沢駅はまったくの



駅前通り界限

最近では前田慶次の甲冑があることで話題になることが多い同館ですが、ここならではの収蔵品は、何といっても火縄銃などの鉄砲コレクションでしょう。実は、創設者である宮坂善助氏は、旧米沢藩士から直接指導をうけて稲富流砲術を習得した人物で、現在でも同館が中心となって「米沢藩古式砲術保存会」が組織されています。その稽古・演武に欠かせないのが宮坂氏の鉄砲コレクション。そう、宮坂考古館の火縄銃は今でも

駅を背にして左にまっすぐ進むと、十字路の角に、生い茂る竹の間から丸い建物が見えてきます。これが、米沢ゆかりの文化財を収蔵・展示する私立博物館の宮坂考古館です。

### 宮坂考古館

このあたりは古くから月見の名所として有名でした。住宅地に囲まれた今で

住之江町通りの北側、金内酒店わきの道に入ってほどなく、住宅街のなかにパッとあらわれる緑地が佐氏泉公園です。「佐氏泉」とは「佐藤氏の清水」という意味で、源義経の忠臣として有名な佐藤忠信・継信兄弟の父佐藤正信の別荘がここにあったという伝説にちなんで名付けられたものです。

も泉は湧き続け、起伏にとんだ園内の地形はかつての別名「月見山」「迎月泉」を彷彿させるに十分な風情を残しています。

### 佐氏泉公園

### 足をのびて...

築した食事処や昭和の香り漂う居酒屋など、新しくも懐かしい雰囲気のある街並みとなっています。



上杉まつりの砲術隊

現役なのです。全国的に見ても、復元・再興されたのではなく連続と伝承されている砲術はたいへん珍しいとのこと。その勇壮な演武は、春の上杉まつりなどで披露され、人々の耳目を驚かせています。



晩秋の佐氏泉公園

**彫刻家 桜井祐一**  
大正三年米沢市生まれ。東京に移り平柳田中に師事し、木彫「さくら」で院展初入選します。戦後米沢に帰り、「郷土で日本美術院賞受賞。郷土の美術家と米沢美術連盟を結成し荒廃した郷土美術界に活を入れました。その後帰京し三十年代から塑像を多く制作し具象派作家としての地位を確立します。「或るポーズ」はパリ、ロダン美術館主催国際彫刻展に日本代表作家として出品した作品です。昭和五十六年国画会展に出品した「五月の女」が遺作となりました。享年六十七才。

**常信庵**  
源義経の忠臣である佐藤兄弟の母が創建したという寺院。義経が奥州にのがれる途中で立ち寄ったという伝説があります。

**音羽屋本館 (現ホテルおとわ)**  
戦前に建てられた和洋折衷の趣ある旅館。建物だけでなく調度品も一具の価値あり。国の登録文化財です。

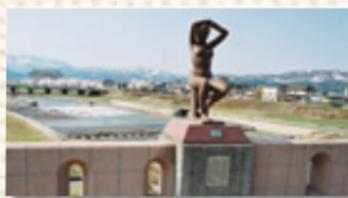
**いぼころり地蔵**  
お地蔵さまのまわりにある小石でいぼをこすって祈願すると、いぼが取れるといわれています。

**鉄道殉難者の慰霊碑**  
鉄道敷設工事や列車事故などで殉職した鉄道関係者を慰霊する石碑がひっそりとたっています。

**宮坂考古館**

# 松川からの眺望

## 米沢と松川



松川と松川から望む  
吾妻山を望む  
住之江橋から

松川は、米沢市を南東から北西に貫流する河川で、山形県の母なる川「最上川」の上流にあたります。ちなみに、「松川」という名称は長井市で白川と合流するところまでで、それ以降は「最上川」と呼ばれます。

この川は、市街地の近くを流れているということもあって、堤防や河川敷が整備され、市民にもっとも親しまれています。特に相生橋と住之江橋の周辺は河川敷が広く、グラウンドや公園として整備され、市民の散歩やジョギング、またサツ

カー・野球などの練習や試合、観光イベント会場としても利用されています。

この場所がもっとも注目を集めるのは、なんといっても上杉まつりののびっグイベント「川中島合戦」の時でしょう。上杉まつりは市民や高校生、観光客



川中島合戦(5月3日)

が上杉・武田両軍に扮し、戦国時代随一といわれた合戦を再現する祭りです。そのハイライト「川中島合戦」会場が、この松川河川敷なのです。

また、この時期、堤防の見事な桜並木、南にそびえる吾妻連峰の残雪が形作る「白馬の騎士」など、米沢を代表する美しい景色をまとめて見る



松川をまたいで泳ぐ鯉のぼりと斜平山

ことができるのも、この場所の魅力です。近年は、川をまたいでたくさんの鯉のぼりが泳ぎ、風景にアウケントを加えています。春風にたなびく鯉のぼりは、まるで元気に松川を泳いでいるようで、見る

者をさわやかな気分にかけてくれます。このほか、夏には花火大会や牛肉まつり、秋には芋煮会、冬には雪灯籠まつりに合わせての雪ぼんぼり点灯など、四季折々、市民にも観光客にも親しまれている松川は、まさに米沢を代表する顔のひとつとなっています。



芋煮鍋



松川堤防の桜と吾妻山の「白馬の騎士」